

第三者意見



慶應義塾大学
ビジネススクール教授
小林 喜一郎

創業171年目を迎えた久光製薬は、「世界の人々のQOL向上を目指す」ことを経営理念とし、「貼付剤による治療文化を世界へ」という企業使命を実現すべく、決意も新たにグローバル戦略を推進してきております。本レポートの冒頭で中富会長、中富社長も言及されていますが、2017年に発表した経営方針の一つであるESGも着実に具体化しつつあります。例えば英国現代奴隷法への対応や2018年3月の久光製薬グループの「人権方針」の設定、中国での新会社設立とそれに伴うさらなるコンプライアンスの推進など、いくつかの具体的な行動が見えてきたことは大きな成果であると思います。これはトップマネジメント自らが、CSRを義務ではなく戦略として捉えている証左として、心強いものを感じます。

また久光製薬は長年、スポーツ活動への取り組み・支援を通じて地域や社会への貢献をしつつ、貼付剤治療文化を発信してきています。その中で東京2020オリンピック・パラリンピックのオフィシャルパートナーとなったことは、まさにその姿勢と企業の持つ技術を世界に発信できる場を得たことになり、企業戦略上も大変意義のあることと思われまふ。この機会をとらえてESGのさらなる具体化を進めながら、戦略とCSRの融合を着実に推進していただきたいと思ひます。今の時代は、地域社会や環境を含め世の中に貢献し、それを発信していくこと自体が、企業の優位性構築につながっていく可能性が出てきた時代だからです。

さて昨年の久光製薬のCSR活動について、それ以前の活動に加え、新たな取り組みや改善がみられる項目が指摘されているので、特にその部分に焦点をあてて評価を行ってまいりたいと思ひます。

本年度の報告書では、昨年に引き続き、久光製薬の海外拠点におけるCSR活動が取り上げられています。まず久光アメリカでは、社員にボランティア活動を奨励するのみならず、CEOのJohn Incledon氏が先頭に立ち業界団体の役員も務めながら、アメリカでの社会的課題の一つである医薬品使用の適切性を確保する啓蒙活動に取り組んでおられます。また2009年に久光製薬の子会社となったノーベン社においても、企業理念の社員への浸透に始まり、労働安全性の確保、サプライチェーンマネジメントの適切性の確保、特にサプライヤーへの環境性能要請基準の明示などを通じて、貼付剤の普及にとどまらず、久光製薬の海外における良き企業市民として努力されております。以上の様に国際的な場でもCSRの精神に

則り、現地法人や子会社が社内外でのエンゲージメントを積極的に実施していることは、グローバル化を進める久光製薬グループの持続可能性経営に大きく寄与することであり、高く評価することができます。またこのような活動を各国で横串を通す取り組みもされていると聞いており、今後さらにグループ全体として迅速かつ効果的に世界で連携してCSR活動を展開していただきたいと思ひます。

また本年度の特集で久光製薬スプリングスの活動にも焦点が当たっておりますが、久光製薬の会社としてのスポーツ振興には70年という長い歴史があります。貼付剤とスポーツは非常に密接な関係性があるため、スポーツに着目した貢献活動は理にかなっています。特に医療施設への訪問やバレーボール教室の開催など、スポーツを通じて社会に健全な精神と活力を与えていこうという姿勢は、まさに久光CSR活動の一つの象徴であると思ひます。またスプリングスは2017年度から佐賀県と連携協定を結び、地域に根差した活動を推進しており、高く評価すべきものであります。こうした地域に根差したスポーツ振興策は、長期的な視点が無ければ決してできるものではありません。オリンピック公式スポンサーになったことも併せ、スポーツ振興活動をますます充実させ、次の10年、20年を見据えて継続していただきたいと思ひます。

本年度CSR報告書の後半で注目すべきは、企業ガバナンスの要である監査体制におけるESGの位置づけに言及されている点です。これは昨年度の中期経営方針におけるESG推進政策の発表に連動して、特に健康増進やハラスメント防止などの社会的側面にも重きを置く姿勢が示されていることであり、大きな前進と思ひます。

顧客とのかかわりでは、医薬品の開発・改善・品質管理・情報発信において引き続き改善努力がみられます。また社会とのかかわりにおいては、地域社会や市民活動への関わり方としての文化・伝統文化イベントの開催、市民講座、工場感謝祭などが引き続き開催されており、より良き企業市民でありたいという久光製薬の意志が表れております。従業員とのかかわりでは、労働安全衛生・職場や雇用環境の改善がなされていること、同時にデータで見ても女性管理職比率や障がい者雇用比率、有給取得などに若干の改善がみられることは良いことです。環境面でも省エネ対策や廃棄物削減、資源保全などに引き続き取り組まれている努力は認めます。一方で継続的に測定する項目の成果指標記述については、その改善度を分かりやすく示すためにも、すべての項目で単年度でなく過去数年の時系列で比較・改善が見えるような開示方法が望まれます。

CSRは企業内のみでの閉じた活動ではなく、広く外部を巻き込む活動でもあります。その意味でも毎年、グローバルなCSR活動や地域団体との連携を取りつつ、これを進めていこうという久光製薬の姿勢は、今後も是非貫いていっていただきたいと思ひます。